

資源添加率向上技術開発研究

(予算区分 県単 研究期間 平成 20 年度～)

担当：伊豆分場 海野幸雄

【研究の背景とねらい】

沿岸資源を持続的に利用するために、県内各地でマダイ等有用種の放流事業が行われています。この事業の安定化に向けた自主的な取り組みが進みつつありますが、放流事業の定着には、放流効果をさらに向上させる技術開発と普及が必要です。

マダイ稚魚の放流適地は一般には水深が 10m 以浅で底質が砂場とされていますが、地先により環境条件が異なるため放流適地の条件は一概には言い切れません。

本研究では、放流種苗の資源添加率を向上させるためにマダイ等の放流適地の条件と放流効果を地先ごとに明らかにし放流技術の定着化を図ります。

【これまでに得られた成果】

適地放流の指標と考えられる「放流マダイの行動の変化」を稲取漁港と伊東市内の小規模港（伊東マリンタウンサンライズマリーナ）で観察しました。マダイは稲取漁港では平成 24 年 7 月 31 日に、伊東マリンタウンサンライズマリーナでは 7 月 30 日に放流されました。

(1) 稲取漁港

- ・放流から 3 週間後のマダイは、港内のほぼ全域に分布を広げたと推察され、数十個体以上の群がり行動をしていました。また、アントクメの繁茂する岩場よりも、水深 10m 程度の砂泥底で多く観察されました。
- ・放流から約 3 ヶ月後のマダイは、水深 10m 付近の砂泥底で数個体が近接して単独行動をしていました。また、砂泥底中の底棲生物を捕食する行動が見られました。

(2) 伊東マリンタウンサンライズマリーナ

- ・放流から 1 週間後のマダイは、港内のほぼ全域に分布を広げたと推察され、数十個体以上の群がり行動をしていました。また、カジメなどの生育する岩場よりも水深 10m 程度の砂泥底で多く観察されました。
- ・放流から約 3 ヶ月後のマダイは、水深 10m 付近の砂泥底で数個体が近接して単独行動をしていました。



写真1 稲取漁港での放流

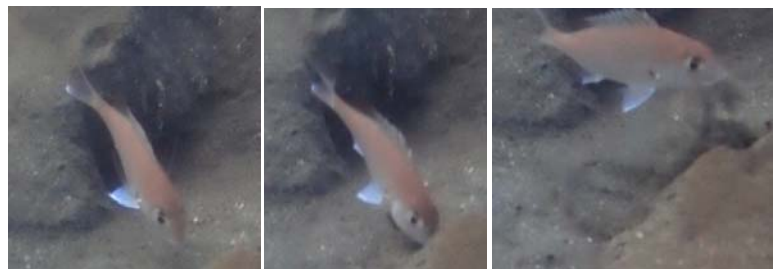


写真2 マダイ稚魚の摂餌行動

【期待される成果】

放流マダイが放流海域に順応していく過程が見られたことから、水深 10m 程度の砂泥底を有する港内は放流適地と推察されました。港を放流地として活用されることで、マダイ資源添加率の向上が図られます。

【今後の計画】

放流効果の把握（平成 20 年～ ）

放流技術の定着化（平成 20 年～ ）

（作成 平成 25 年 4 月）